

MIGUEL DE UNAMUNO



COMO SE HACE UNA NOVELA

Y

OTRAS OBRAS LITERARIAS



ウナムーノ著作集5

人格の不滅性——小説・詩・戯曲

一九七三年六月一五日初版第一刷

発行所 財団法人 法政大学出版局

〒106 東京都港区南麻布二―八―四

電話 東京03(四五三)〇七一七

振替 東京九五八一四

製版／印刷 三和印刷

製本 鈴木製本所

* 定価は箱に表示してあります

内部の調べ 1

小説はいかにして作られるか 37

序 39

ウナムーノの肖像 43

コメンタリオ 51

小説はいかにして作られるか 66

つづき 110

他 者 135

殉教者、聖マヌエル・ブエノ 他二編 183

序 文 185

殉教者、聖マヌエル・ブエノ 201

将棋さしドン・サンダリオの小説 245

貧しい金持、もしくは生の喜劇的感情 285

解説 323

内部の調べ

萩内勝之訳

Rimas de dentro (1923)

I

芸術？ なにゆえの芸術？

ぼくの魂よ おまえは 歌うのだ

歌え おまえの流儀で……

いや 歌うのではなく 叫べ

おまえのひたぶるの思いを 叫べ

彼らの音楽になど はばかりな

聞きながせ

彼らはまさしく芸術家！

心まずしいやつほど

明白な結論を欲しがるものだ

おまえは探せ たゆまず探せ 探すのだ

見つかるあてのないところを

完璧を避け

完成を

いや なにごとも 完成させるな

なにごとも 充足させるな

おまえの生みだすものを すべて

より高きものの胚種たらしめよ！

彼ら とはだれのことか？

心まずしいやつは 耳で

ものを聴くのだ

おまえは叫べ きょう一つ

あしたも一つ

おまえに その日その日が

思いと 叫びをもたらす

きのうのおまえは

きょうのおまえではなく

あしたのおまえは ぼくのあわれな魂よ

どんなおまえであるのか？

ぼくは ぼく自身の 希うものを知らない

——自己認識がない——

また その必要もあるまい！

ぼくは 風になふられる

ひよわな輩 以上のなにもの？

主の風 無限の風

どこから吹いて どこで消えるとも知れない風が

吹けば おまえは 腰を折れ

ささやこうが うなろうが

されるままでいよ

ゲイジュツ？ とはそも なにもの？

堅笛とはならず

葦のままでいよ

しがない野の葦でいて

淀みなく流れる

せせらぎを

緑葉でおおってやれ

路傍には立つな

巡礼の

なぐさみとも

旅人の

道辺のすさびともならず

あてどなく

さまよう人が

おりふし訪ねくるだけの

ここに

ひきこもって

野の葦よ

その人に 伝えてやれ

永遠なる 主の風音を

神秘の叫びを

きようは東

あしたは西

或いは北から南から 渦巻く風の音を

といえは「なに？」と芸術家の面々は

芸術的な

——すなわち 論理的な——

質問を発する 堅笛を吹きならす

「しがない葦とは もってのほか！

風のおもちゃだ！

自己矛盾だ！」

おまえを吹きぬける風は ぼくの魂よ

おまえの主 神なのだ

おまえの内部で自己矛盾しているのは

あわれな葦よ 神なのだ

神は なんのたくらみもなく 自分の力をためし

——たくらみは人間のもの

有限なる存在のもの——

万能をもてあそび

あわれな葦よ おまえは 神の力の

おもちゃなのだ

野の葦よ

おまえの緑葉は

奔放な風のまにまに

根は

淀みなく海にむかう

流れのほとりに おろせ

葦よ ぼくの葦よ

主の聖霊の風になびけ

きょうはこちらへ あしたはあちらへ

たくらみも芸術もなく吹きつけては

おまえの内部で……歌うのではなく

叫び 唸り 囁いているのは

野の葦よ

主の魂なのだ

葦よ ぼくの葦よ

堅笛とはならず

野の葦のままでいよ！

他におもねらず

毅然として

野の紋よ

神のきまぐれにのみ 腰を折れ

野に生う琴の

清響の絃よ！

おまえの棲処は

芸術家や旅人のゆきかう

街道からは はるかに遠く

芸術の行商もかよわず

主のしもべも踏み迷う

出口のない 草深野

仰ぎみる星の道をおいては

小径さえない野の末だ

葦よ ぼくの葦よ

星夜を裂いて

鳴り渡れ！

佗寝の

夢を 打ち破れ！

野の葦よ

芸術やらに

なぜこだわる？

葦よ ぼくの葦よ

主には腰を折れ 主は きまぐれに

おまえの内部で 歌うのだ

おまえの内部で 野の葦よ

主は きまぐれの力だめしに

おまえをもてあそぶのだ

主のおもちゃであれ ぼくのあわれな葦よ！

一九〇八年三月

Ⅱ 降誕祭歌

大いなる神祕！

神が生まれた！

生まれるものは みな苦しみ そして死ぬ！

その子を ゆりかごへ！

見たまえ 苦患に泣く子を

神の涙を！

命がお氣に召した

それゆえ命の上に 聖らの露を流すのだ

生まれるものは みな苦しみ そして死ぬ！

この子もまた

受難と死の苦しみをあじわうのだ

いまはいきいきと

母の乳を求めるばらも

枯れるとき

熱い愛の渴きをいやすべく

胆汁と辛酸を飲まねばならぬ

いまは 愛のみなきる胸の内に

隠れているあいくるしい手も

いつか 栄光の日

血の泉に変わるのだ

やさしい母よ

死の目のために その子を育てよ

泣いているのは

命が泣いているのだ その子の口を

おまえの命で とじてやれ！

生まれるものは みな苦しみ そして死ぬ！

その子もみじめな死をとげるのだ！

神が生まれた！

いや 神は生まれない

子供になった！

子供になるものは 苦しみ そして死ぬ！

神よ 感謝します！

あなたは ぼくたちに死をたまわること

終りのない

命の命を さずけたもうた

主よ あなたは ぼくたちから肉体をうばうことで

ぼくたちを 生の勝利者にし

そして 十字架の苦しみの中で 命をすてて

ぼくたちを 死の勝利者にしたもうた

主よ 感謝します！

よくぞ ぼくたちの胸に

死の胸に 生まれたもうた

あなたは 子供になって

ぼくたちを 神にしたもう

神よ 感謝します！

一九〇八年二月

Ⅲ

やがて別れに際して ぼくはつぶやいた
人間は みな兄弟

世界は巨大なビルバオだ

一九〇八年四月一八日

ビルバオよ おかげで きょうは楽しかった 朝方

郷里の男に出会ったのだ

ぼく同様 しあわせにも おまえの子に生まれた男に

目には イバイサバルの光をやどし

おだやかな口調には

わが町よ おまえをほうふつとさせる

冷静でしかも熱い魂がこもっていた

あれは ぼくの魂がまだけがれていない頃

けがれない言葉が

そこへ入り込もうとして

ふるえたあの音 あの空気だ

おまえを胸に吸ったとき ビルバオよ

ぼくとおまえのもう一人の息子は

ビルバオ魂の中で兄弟になった

彼の手をまだぼくの手に

* ビルバオ BILBAO ビスカヤ県の首府。ウナムーノの

生地。

** イバイサバル IBAIZABAL バスク地方を流れるネル

ビオン川下流の別称。バスク語で「広い川」の意。

Ⅳ 汽車の中

泰然として 地歩をゆずらず

大地をふんまえて

木立がつづき

村の鐘楼は

たてながの目で

通りすがりのぼくたちにあいさつする

牧童は

立てた杖に

あごをあずけ

しばし 悠然とぼくたちをみるが

そのまわりで

羊は 頭をたれたまま

ぼくたちの通るのに気づきさえしない

かたや 鉄の怪物の

——ぼくたちを護送する

走る牢獄の——

鼻息は

静まりかえった野に

荒々しい前進の跡をしるし続けるのだ

この汽車の中には

財産や健康や歓喜を求め

すりぬけてゆく幸福のあとを追う

囚われのぼくたちがいて

幸福を

置き去りにし 悲惨を野に

残して 行く

あい席の男は 眼をこすって

人生よ いそげやいそげと

時を数えているが

着いたころには

おそらく 命ある人生を抱くことはできまい

怪物の

走る牢獄の 鼻息は

刻むがごとく あえぎの跡をしるし

もう一人 あわれな男が

ぼくのそばで咳込むと

怪物は 機械のドラゴンは

ぜんそく病みのように

彼の咳に調子を合わせる

かなたの地平の

光と緑をいただく

丘が

ゆっくりと流れる

ぼくたちは 前進する

ぼくたちは前進し あとには

閑々として大地がのこる

牛が一頭顔をあげて

ちらと

ぼくたちをみる

反応のないその目

牛はまた静かに草をはむ

おさなごが 声はずませ

すれちがいざま

澄みきった 鈴のようなサヨナラ

消えてゆくその声

遠くで 白いハンカチーフが

ひらひら

ハンカチーフの言葉で

「ゴキゲンヨウ！」

ドラゴンは 小休止

水を飲む

道辺の木立で

うぐいすが鳴く

ドラゴンは また走りだす

うぐいすは

しずかな木立に残って

歌い続ける

うぐいすは歌い 怪物は

前進を続ける

この走る牢獄の中

睡魔が ついにぼくを征服した

わが家に着いて

ぼくは思った 残された

人生のもとに還ったと

不動のわが家

大地に根を張ったわが家

一九〇八年九月

V 家庭の瑣事

娘が 文字ならぬ文字で

いたずら書きをした

「パパ これなんて書いてあるの？」

ぼくにみせて 訊く

眉をしかめたそのインテリぶりよ

ぼくはその詩にまごう数行に目をこらす

「これかい」「ええ わたしが書いたの。なんて

書いてあるの？ わたし読めないもの」

「なんにも書いてないよ！」

ぼくは即座にそう答えた

「なんにも？」 と彼女はしばらく考え込む――

――あるいは少なくともぼくにはそう思えた――

いったい ぼくたちにせよ 他のだれにせよ

天賦の才などというものの備わることがあるのか？

それから ぼくは考え込んで つぶやいた

秘密を教えて 果してよかったのか？

——娘の秘密でも あの乱暴な数行の秘密でもない

ほかならぬ ぼく自身の秘密を——

神秘的なミューズなり

潜在才能なり

人間の肉体に憑よろうとして

さまよう精霊なりが

あの謎めかしい数行を

ぼくの娘に書き取らせたのではあるまいか？

あれは 来るべき時代の言語をしるす

文字ではあるまいか？

あれは なにか意味を持つのではあるまいか？

ぼくはもしや あの数行の中で生きてきたのでは？

木も 雲も

鳥も 川も 星も あの数行以上に語らず……

いや語らずして すべてを語っているではないか！

だがその秘密をにぎっているのだ？

一九〇八年五月三一日

VI

青年時代を過ごした部屋で

ぼくのもとへ ぼくの夜が帰ってきた

からっぽの夜

街頭のざわめき

宵の雑踏

馬車の車轢

きれぎれの会話

そして とぎれがちに聞こえる

つたないピアノの なつかしい古曲

ぼくの夜の宝は こうして

この部屋に沈んでいった

ぼくはここで眠り 夢をみ 希望をよそおってみたが

あの希望は 思い出そうとしても

いたずらに寝返りをうつばかり……

あのぼくは捉えられず いまのぼくは別のぼく……

ぼくだったとは思うのに その感じがない

ただ思うだけ

無が残るだけ　いまの現実がぼくの希望を奪ったのだ

過ぎ去った日々は　どこへ行った？

かつてのぼくは　どうなった？

かつてのぼくは死に　地の底へ……

あまたの日々の息子たちは

ぼくの意識の

暗い採掘場によこたわって

何をしているのか？

魂は墓場だ

そこではかつてのぼくたちが　ひとりぼっちでよこたわり

日々が日々を食らい……

……

……

目を閉じてみよう

どうだ　ぼくの忠実な記憶よ　思い出せないか？

かつてのぼくは　蒼白く

うれたげに栄光の日を夢みる

少年だった……

……

……

ああ　ぼくにぼくがわかるなら！

見せたい　かつてのぼくに　いまのぼくを！……

見せたい　いまのぼくに　かつてのぼくを！

ぼくとぼくが抱き合って

暗い未来に過去をつなぐ糸が

甦るなら！

かつてのぼくは死んだ　いや　生きてこなかった

かなたの霧の中

はるかな過去の暗闇に

見ず知らずを見るように

二十五歳のぼくが見える

かつての日々の子は　おのれの前日の子を喰らい

きょうという日の屍から　あすという日が現われる

ああ　いまはなき無数のぼくよ！

それにしても　最後のぼくは　死を待つぼくは

ひとりぼっちで死ぬのか？

ああ　怖るべき死の神秘！

かつてのぼくは

ぼくの床に こぞり来て

臨終の激しい孤独におののく

ぼくの胸を なぐさめてはくれないのか？

いまわの際にすら

若き日のぼくの魂よ おまえたちは来てくれないのか？

幼き日のぼくの天使よ

ぼくの青春の天使よ

ぼくの断末魔を

曙光の香でやわらげてはくれないのか？

ぼくは無数にいたのに！

あれほどいたのに

一人でさえなくなるのか！

このあわれなウナムーノは

名が残るだけなのか？

.....

.....

とぎれがちに聞こえる

つたないピアノの

なつかしい古曲も

やがて消え

霊界に

苦渋の奏でる

旋律がただよいわたる

ああ 魂の楽の音よ！

ぼくの過去と現在と未来

人をさいなむ永遠の神秘の

莊嚴な 交響楽よ！

ああ 限らない沈黙よ！

ぼくたちがこんなに叫んでも

おまえの冷たい胸は 破れないのか？

ぼくの魂よ おまえは どこにいるのだ？

ビルバオにて 一九〇九年八月